

アフリカと踊る？！

2021年8月 NO.102

100号記念 企画座談会 アフリカチームの歩み その3

中村：今回皆さんに話していただきたいテーマのひとつとして活動地を訪問したときのお話と
うか。今井さんは代表理事なので、何度も
行かれてるとは思うんですけども。

今井：ボランティア時代のっていうことだね。

中村：そうですね、やっぱり最初に行った時って
色んなカルチャーショックもあったでしょう
し、その辺りのお話って思い返しながらか
せてもらえると嬉しいんですけども。

今井：南アフリカにスタディツアーで行って、あ
ちのカラっていう所で農業の活動をしてい
たところに行ったんですけども。もちろん
ジョハネスバーグに行って、その活動地のと
ころに行ったんだけど。ジョハネスバー
グではソウェトの方に行ったけども。まあと
にかく楽しかったって記憶が残っていて。
行った人たち同士、行ったメンバー同士って
いうのもすごく、当時JVCのインターンの1
期生だったチバシュウコさんっていう人がア
テンドをしてくれて。アジ研(ジェトロ・アジ
ア経済研究所)にいるマキノクミコさんもメ

バーになっていたり、他にももちろん何人も
いて、それもすごくお互いに面白かったり刺
激があったし。現地ではドウドウちゃんと
色々話をしたりして楽しくて。よく覚えてい
るのはジョハネスバーグでミュージカルを
観に行ったんですよ。その時、俺疲れて居
眠りして、ドウドウに「あの時寝てたね。
」ってずっと言われ続けて。そういうこと
ばかり記憶に残っているけど、もちろん勉
強になったのと同時に、すごい面白かった記
憶が残ってますね。

中村：ドウドウちゃんの思い出という所では、何か
印象に残るエピソードがあれば。

石川：ドウドウちゃん、ボランティア時代にあんま
り会ってなくて、私やっぱりその一番印象に
残っているのは、ボランティアチームでさっ
きのビクターマトムさん。津山さんの元で家
族で写真家の方、彼なんかやっぱりアパルト
ヘイトのもうまさに経験者であるのに、すご
い笑顔が優しくて、本当に今でも忘れない、
彼の報告会をボランティアチーム向けにして



▲南アフリカ スタディーツアーでHIV施設への訪問
エイズの苦悩を演劇で表現（2005年）

くれたときに、「Diversity is beautiful. (多様性は美しいもの)」だっていうのを一言言って、彼自身すごく苦労されたはずなのに、こういう風に笑顔で言えるようになるって何だろうなっていう衝撃を受けたのをボランティア時代に覚えていて、そういった言葉とかを身近で聴けるっていうのは、「ああ、ボランティアやっていてよかったな」みたいな、すごく思い出として、現地スタッフとの交流という意味では、すごく覚えている一コマかなと思います。

栗田：自分もドゥドゥちゃん実はあんまり接点ないですけど、現地に行ってよかったっていうのは卒業旅行で無理やりエチオピアに行かせてもらったんですね。スタッフさんはすごい忙しいって言っていて。その当時エチオピアで確か内戦が起きる起きないって話があって危ないと。で、お前海外慣れているのかって言っ。その当時、僕、海外に行ったこと一回もなかったんですよ。けど、もう社会人になっ

たら行けないなと思って本当頼み込んで。たまたまその当時ボランティアやっていたらしゃった尾関さんがエチオピアに業務で行くっていうんで抱持ちだったらやらせてやるって言って。で、もう飛びついて「何でもやります」って、連れて行ってもらったんですね。その時これは本当に自分の経験がなかったので、援助を受ける人っていうのはなんか「かわいそうな人なんだろうな」って勝手に思っていたんですよ。そういうイメージがすごくあったのが、ちょっと他のNGOが支援している農村に行った時に「俺たちは自分たちで立ち上がるんだ」っていうのをすごく強く言っていて、そこで考え方がもう180度ガラッと変わって「あ、こういうことなんだ」っていう、逆に元気をすごくもらって。いつか、こういう世界に飛び込みたいなって、考え方が本当変わったのを今でもすごく覚えていますね。

中村：それは本当に現地に行かれて、いい経験がされましたよね。中川さんとか、そういう衝撃

を受けるような、出会いとか、ありましたか？

中川：そうですね、一人スタディーツアーということで卒業旅行に、まあジンバブエと南アに行ったんですけど、その時にさきほど今井さんがおっしゃった、カラっていうところに行って、カライザーブっていったかな。そこでミーティングに参加させてもらって、実は私ほとんど英語がわかんなかったの、何言ってるかよくわからなかったんですけど。実はその時に同い年くらいの青年がいたんですね。彼はシンピューエっていう名前なんですけど、結構それなりに拙い英語で話して、お互い頑張ろうねと言って帰ってきて、しばらくして彼はHIVで死んでしまったんです。それを聞いてすごいショックで。やっぱりそういう彼みたいな人が出ないように、自分ができるとは、やれる範囲ですけど頑張ろうと思直したというのはあります。あとは仕事でエチオピアに行ったときに、ここは昔、日本のNGOが植林したところだよって行って行ったところがJVCの活動地だったことはありました。マーシャ村ですね。石川さん知っているかな。

石川：えー、マーシャ行ったんだ。

中川：爆弾が埋め込まれたところでしたっけ？で、僕その関係者だよって、その爆弾の話聞いていたの。へーそうなんだってほぼ無関心。

一同：(笑)

栗田：マーシャ村行った時って、まだ植林って続いていたんですか。

中川：いえいえ、ここが植林していた場所だよっていう所を見せてもらって。「えー、こんなところで活動してたんだ」というのは、結構、生活環境は当時でもしんどかったです。

中村：あと、小河原さんは何か印象に残っているのはありますか？

小河原：僕はスタディーツアーで南アフリカに行った時はエイズがすごかった。HIV患者の施設とかも行ったんですけど、やっぱり衝撃的でしたね。みんな明るく接してくれたんですけど、死期を間近にしている人の施設っていうのがまた別にあるんですけど感慨深いものがありましたね。言葉が悪いですけど当時のアフリカの人口爆発を止めているのはエイズのおかげだとか言う風なことも言われていましたけど、墓地に案内してくれたんですよ。すごい広い墓地で、しかもすごく空いてる場所もあるんですけど、これももうあと数年で埋まってしまうって言われた時には、言葉では言い表せなかったですね。

中村：HIVのことはアフリカチームとしても結構勉強会というか積極的にやっていた時期もあったので、それを実際に現地に行かれて、肌身で感じるっていうか、いかに重い問題なのかっていうことを感じますよね。なんか印象に残る出来事っていうか、あるいは印象深い人、人々でもいいですけど、とりあえずアフリカチームの歴史を語るという視点から、「こんな人いたよね」、「こんなことあったよね」とか。なんか思いつくことがあれば。

小河原：僕は、ヤス君とかが懐かしいなっていうか。

今井：うんうん。俺もヤス君は懐かしい。当時、19歳で来たのかな？

石川：うん、若かった、学生。ド派手な服着てきてたね。

中川：うん、(今) 学院長ですか。

今井：ヤス君は印象深かったけど、あと思い出すのはやっぱり野木さんと薪田さんいたよね。

小河原：アフリカ3人娘ですね。

今井：朋ちゃんと3人娘っていう印象がすごく強くあって、逆に栗田さんとか小河原さんとか獅

子さんとかは逆に男3人組と、やっぱり女性の方の3人もすごい、もうその3人はアフリカチーム。90年代の終わりから2000年代の頭くらいにかけては、その3人が引っ張ってた感じだね。毎回毎回来てるのがその3人ですごい強さに引っ張ってた感じで印象がパワフルな人たちだなってうか、残ってるよね。そのあとみんなそれぞれあちこちで活躍してる。

中川：あ、でも蒔田さんで思い出したことがあります。当時はまだ携帯電話がなかったので、蒔田さんにJVCの名前を出さないでくれて、電話した時にですね。やっぱり親がNGOっていうのが世間に広まってなかったから怪しい団体に関わっていると思うからJVCの名前を出すなって、それはすごい印象に残っています。そういう時代もあった。

栗田：確かに自分も社会人の1年目、昔務めていた会社ですけど。体質が古い会社っていうのはあったんですけど、火曜日に18時くらいに上がるうとして、「お前こんな早く上がってどうすんだ」って言われて、「いや、ちょっとNGO、ボランティアとかやってるんです」って言ったら、「おまえは活動家か」って言われたんですよ。最初活動家ってなんのこと言ってるんだろって思って、わからなくて、「いや、僕普通にアフリカとかやりたいんですけどねえ」みたいに話したりして、「おまえ転職すんのか!？」って言われて、いやいやそんな話じゃないですよとか、結局そのあと転職しましたけど、あの、そういう、ほんとNGOっていうのが知名度すごい低い時代ではあったなあとはいえますね。まあ結局そのあと転職しましたけど。なんかそういうNGOっていうのが知名度すごい低い時代ではあったなと

は思いますね。

小河原：よく間違えられたのが、非政府組織が反政府組織っていう風に解釈する人もいて、やっぱりそれで活動家って思われたかもしれないのかな

石川：でも私就職面接でそれ言われた。仕事終わってからとか、やってることありますかとかが言われて、ボランティアやってるっていうと、そういう自己満足みたいな人多いんですよね。とか、そういう活動やっている人って、強い思いを何かしら持って全体と一緒にできないとかありますよね、って言われて、そこ落ちたんですけど。そんな特殊なことじゃなくて、ピアノ好きな人がピアノ習うみたいに、関心あるところに行くっていうそういうイメージですって言ったら、「いやいや」って言われて、これはダメだなって思った。今思うと、そういう認識のされ方だったし、そういう時代だったのかなーって。でもやっぱり、こうやって90年後半から25年、そういう人たちがアフリカとかボランティアっていう活動を軸に、細く長くつながってこられてひとつの思いを共有できる仲間ができたっていうのは、私はボランティアチームに入って一番良かったなと思っているところで、自分のJVCとの関わりがなくなった今でも続けていけるっていうので、やっぱりボランティアチームってすごくよかったなって思うし、ぜひぜひ次に、、なんか締めるみたいになっちゃったんですけど、、

中村：いい話をし始めたから（笑）

一同：（笑）

その4に続く